

JP 2001-178858A

ABSTRACT

PROBLEM TO BE SOLVED: To provide a practice tool of Kendo that can shorten a period for progress by quickly strengthening hand and bust muscles, or the like.

SOLUTION: A practice tool A of Kendo has a blade edge 10 and a grip 20. The blade edge 10 has rod-shaped parts 10a and 10b being arranged nearly parallel at specific intervals. Also, a weight 30 is detachably mounted to the tip side of the blade edge 10.

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開2001-178858

(P2001-178858A)

(43) 公開日 平成13年7月3日(2001.7.3)

(51) Int.Cl.⁷

A 6 3 B 69/02

識別記号

F I

A 6 3 B 69/02

テ-マコ-ト*(参考)

A

審査請求 有 請求項の数 6 O L (全 5 頁)

(21) 出願番号 特願平11-370143

(22) 出願日 平成11年12月27日(1999. 12. 27)

(71) 出願人 500005402

出▲崎▼ 澤夫

長崎県北松浦郡宇久町平郷2702-5

(72) 発明者 出▲崎▼ 澤夫

長崎県北松浦郡宇久町平郷2702-5

(74) 代理人 100074022

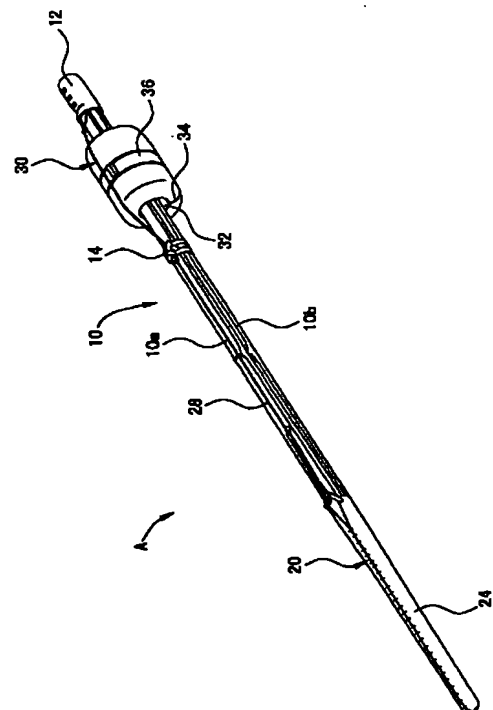
弁理士 長屋 文雄 (外1名)

(54) 【発明の名称】 剣道練習具

(57) 【要約】

【課題】 手首、上半身の筋力を短時間で強化する等して、上達期間を短くすることができる剣道練習具を提供する。

【解決手段】 剣道練習具Aは、刃先部10と柄部20とを有し、刃先部10は、所定間隔を介して略平行に設けられている棒状部10a、10bを有する。また、刃先部10の先端側には、おもり部30が着脱自在に取り付けられている。



【特許請求の範囲】

【請求項１】 剣道練習具であって、手で把持するための柄部と、該柄部に連設された刃先部であって、所定間隔を介して略平行に設けられた２本の棒状部を有する刃先部と、該刃先部に設けられたおもり部と、を有することを特徴とする剣道練習具。

【請求項２】 上記おもり部は、上記刃先部の先端側に設けられていることを特徴とする請求項１に記載の剣道練習具。

【請求項３】 上記おもり部は、上記刃先部を挿通するための挿通穴を有することを特徴とする請求項１又は２に記載の剣道練習具。

【請求項４】 上記柄部は、柄本体部と、該柄本体部を被覆する柄皮部とを有し、また、該刃先部の先端には、上記棒状部の先端部を被覆するための先皮部が設けられており、さらに、該柄皮部と先皮部間には、弦が設けられており、上記おもり部は、該弦の内側に設けられていることを特徴とする請求項３に記載の剣道練習具。

【請求項５】 上記おもり部は、上記刃先部に対して、着脱自在であることを特徴とする請求項１又は２又は３又は４に記載の剣道練習具。

【請求項６】 上記刃先部における棒状部が、竹又はカーボンにより形成されていることを特徴とする請求項１又は２又は３又は４又は５に記載の剣道練習具。

【発明の詳細な説明】

【０００１】

【発明の属する技術分野】 本発明は、剣道練習具に関するものであり、特に、剣道の素振りに用いる剣道練習具に関するものである。

【０００２】

【従来の技術】 従来より、剣道の練習においては素振りが行われるが、その素振りに際しては、通常の竹刀を用いるのが一般的である。この竹刀は、４本の竹材を筒状になるように組み合わせて形成されている。

【０００３】

【発明が解決しようとする課題】 しかし、上記竹刀は４本の竹材で構成されているため、しなりが少なく、弾力性が低い。そのため、手首、筋力の強化に時間がかかり、上達に時間を要する場合があった。

【０００４】 そこで、本発明は、手首、上半身の筋力を短時間で強化する等して、上達期間を短くすることができる剣道練習具を提供することを目的とする。

【０００５】

【課題を解決するための手段】 本発明は上記問題点を解決するために創作されたものであって、第１には、剣道練習具であって、手で把持するための柄部と、該柄部に連設された刃先部であって、所定間隔を介して略平行に設けられた２本の棒状部を有する刃先部と、該刃先部の先端側に設けられたおもり部と、を有することを特徴と

する。

【０００６】 この第１の構成の剣道練習具においては、刃先部が、所定間隔を介して略平行に設けられた２本の棒状部を有し、該刃先部の先端側におもり部が設けられているので、本発明の剣道練習具によって素振りをを行うと、しなりが大きくなり、手首等の筋力を強化することができる。また、おもり部の重さを感じながら素振りをするので、素振り動作に際して無駄な動きがなくなり、個人特有の癖の矯正にもなり、また、不適切な癖もつかない。よって、短期間で剣道の上達を図ることができる。

【０００７】 また、第２には、上記第１の構成において、上記おもり部は、上記刃先部の先端側に設けられていることを特徴とする。

【０００８】 また、第３には、上記第１又は第２の構成において、上記おもり部は、上記刃先部を挿通するための挿通穴を有することを特徴とする。

【０００９】 また、第４には、上記第３の構成において、上記柄部は、柄本体部と、該柄本体部を被覆する柄皮部とを有し、また、該刃先部の先端には、上記棒状部の先端部を被覆するための先皮部が設けられており、さらに、該柄皮部と先皮部間には、弦が設けられており、上記おもり部は、該弦の内側に設けられていることを特徴とする。よって、素振りに際して、おもり部が抜け落ちるのを防止することができる。

【００１０】 また、第５には、上記第１から第４までのいずれかの構成において、上記おもり部は、上記刃先部に対して、着脱自在であることを特徴とする。よって、重さの異なる他のおもり部への交換等を行うことが可能となり、剣道練習具を使用する者の体力等に合わせて使用することが可能となる。

【００１１】 また、第６には、上記第１から第５までのいずれかの構成において、上記刃先部における棒状部が、竹又はカーボンにより形成されていることを特徴とする。つまり、剣道練習具が竹又はカーボンで形成されていることにより、しなりを大きくすることが可能となる。また、通常の竹刀を持った場合と比べて、違和感を小さくすることができる。

【００１２】

【発明の実施の形態】 本発明の実施の形態としての実施例を図面を利用して説明する。本発明に基づく剣道練習具としての剣道練習具Ａは、図１、図２に示されるように、刃先部１０と、柄部２０と、おもり部３０とを有している。

【００１３】 ここで、刃先部１０は、棒状部１０ａと、棒状部１０ｂと、先皮部１２と、中結部１４とを有している。棒状部１０ａ、１０ｂは、竹材によって形成されている。この棒状部１０ａ、１０ｂは、通常の竹刀において使用されている竹材と同様のものであり、断面形状は微細な略円弧を呈する平板状の形状を呈している。ま

た、この棒状部10a、10bともに、竹の皮が外に向くように形成されている。また、棒状部10aと棒状部10bとは所定間隔を介して略平行に設けられている。

【0014】また、上記先皮部12は、棒状部10aと棒状部10bの先端を被覆するように略袋状に形成されている。この先皮部12は、皮材により形成されており、通常の竹刀における先皮と同様の構成である。また、棒状部10aと棒状部10bとが所定の間隔をもって配設されるように、該先皮部12内には、棒状部10aと棒状部10b間に、ゴム等により形成された間装部材（図示せず）が設けられている。

【0015】また、上記中結部14は、紐状部材により形成され、上記棒状部10a、10bにおける中間位置のやや先端側に設けられ、棒状部10aと棒状部10bとを同時に縛る状態で配設されている。

【0016】次に、上記柄部20は、柄本体部22と、柄皮部24とを有している。ここで、該柄本体部22は、図2に示すように、棒状部22a、22b、22c、22dを有している。棒状部22a、22b、22c、22dは、竹材によって形成されている。この棒状部22a、22b、22c、22dは、通常の竹刀において使用されている竹材と同様のものであり、断面形状は微細な略円弧を呈する平板状の形状を呈している。そして、この4つの棒状部22a～22dは四方を囲むように略円筒状に配設されている。また、この棒状部22a、22b、22c、22dは、竹の皮が外に向くように形成されている。なお、棒状部22aは、上記棒状部10aから延設されており、該棒状部10aと棒状部22aとは一体に形成されている。同じように、棒状部22bは、上記棒状部10bから延設されており、該棒状部10bと棒状部22bとは一体に形成されている。

【0017】また、柄皮部24は、上記柄本体部22を被覆するように略袋状に形成されている。この柄皮部24は、皮材により形成されており、通常の竹刀における柄皮と同様の構成である。このように、柄本体部22が該柄皮部24により被覆されているので、棒状部10aと棒状部22aを構成する竹材において柄皮部24から露出した部分が、上記棒状部10aとなる。また、同様に、棒状部10bと棒状部22bを構成する竹材において柄皮部24から露出した部分が、上記棒状部10aとなる。

【0018】また、先皮部12と柄皮部24間には、図1に示すように、弦28が設けられている。この弦28は、上記中結部14によっても止着されている。

【0019】また、おもり部30は、おもり本体部31と押さえ部材36とを有し、該おもり本体部31は、内部に挿通穴32を有する略円筒状に形成されており、切れ目34が長手方向に設けられていることによって刃先部10に対して着脱自在に形成されている。このおもり本体部31は、ゴム材等の弾性部材により形成されてい

る。また、押さえ部材36は、おもり本体部31の側面に周状に設けるものであって、この押さえ部材36は、一部に切れ目を有する略リング状形状を呈し、弾力性を有するとともに、該切れ目を介して開状態としても、リング状形状の閉状態に復帰するようになっている。このおもり部30は、上記刃先部10の先端側に設けられる。

【0020】なお、この剣道練習具Aの全体の長さは、通常の竹刀と略同様の長さである。つまり、3尺4寸～3尺6寸の長さを有している。なお、本実施例の剣道練習具Aは、従来からの竹刀を用いて、刃先部における2本の竹材を欠切することにより作成することも可能である。このようにすることにより、製造コストを押さえることが可能となる。

【0021】上記剣道練習具Aの使用状態について説明する。まず、おもり部30を取り付ける際には、まず、おもり本体部31を刃先部10に取り付ける。つまり、棒状部10a、10bがおもり本体部31の挿通穴32に挿通する状態とし、その後、上記押さえ部材36でおもり本体部31の側面を押さえる。なお、このおもり部30を装着する際には、図1に示すように、おもり部30が、先皮部12と中結部14の間で、弦28の内側になるようにする。このようにすることにより、おもり部30が素振りの最中に脱落するのを防止することができる。つまり、おもり本体部31を押さえ部材36により押さえることにより、おもり部30が剣道練習具Aの側方に脱落することがなく、また、該おもり部30が先皮部12と中結部14の間で、弦28の内側になるように装着することにより、おもり部30が先端側に抜けることがなく、また、基端側にずれることもない。

【0022】おもり部30の装着が完了したら、剣道練習具Aの柄部20の部分を両手で握って素振りを行う。つまり、上記構成の剣道練習具Aを素振り用竹刀として使用する。

【0023】なお、おもり部30を取り外す場合には、まず、押さえ部材36を外した後に、おもり本体部31を取り外せばよい。

【0024】上記構成の剣道練習具Aによれば、上記剣道練習具Aは刃先部10が2本の棒状部によって、略平行に設けられており、おもり部30が該刃先部10の先端部分に装着されているため、しなりやすく、弾力性が高い。そのため、該剣道練習具Aを用いて素振りをした場合、手首又は上半身に、より大きな負荷がかかるため、手首、上半身を短時間で強化することができる。また、おもり部30の重さを感じながら素振りをするので、素振り動作に際して無駄な動きがなくなり、個人特有の癖の矯正にもなり、また、不適切な癖もつかない。よって、短期間で剣道の上達を図ることができる。

【0025】本実施例の剣道練習具を用いれば、素振りという一人の練習で十分上達を図ることができるので、

指導者不足の解消にも役立つことができる。

【００２６】なお、本発明は、本実施例の構成のみに限定されるものではなく、本発明の要旨を逸脱しない範囲で多様な態様が可能である。例えば、上記実施例においては、棒状部１０ａ、１０ｂとして、竹材を例にとって説明したが、これには限られず、例えば、カーボンであってもよい。この場合、竹刀の外観を得るため、カーボンに着色するのが好ましい。また、竹材としては、通常の竹材の他にバイオ材を用いてもよい。

【００２７】また、素振り用として、しなりの大きい剣道練習具を用意するとともに、打ち込み・跳躍素振り用に該素振り用のものに比べてしなりの小さい剣道練習具を用意することにより、これらを使い分けて練習するのも好適である。

【００２８】また、上記の説明では、剣道練習具Ａは通常の竹刀と略同様の長さを有するとして説明したが、もっと短い長さのタイプを用意してもよい。これは、片手で持って素振りを行い、特に、手首を強化するためのものとして使用するのである。

【００２９】また、上記おもり部３０の重さは、複数種類（例えば、３つ）のものを用意するのが好適である。

【００３０】また、子供用の剣道練習具として、長さの短いタイプのもを用意することも好適である。この場合、剣道練習具の全体の長さとしては、３尺～３尺２寸程度となる。また、そのような子供用の場合には、おもり部の大きさも小型にする必要がある。

【００３１】また、上記の説明では、おもり部３０の挿通穴３２に刃先部１０を挿通した状態とすることにより、刃先部１０の先端近くにおもり部３０を取り付けるものとして説明したが、これには限られず、刃先部１０の中に固定して装着するようにしてもよい。つまり、棒状部１０ａと棒状部１０ｂの間におもり部を挟んだ状態

で取り付ける。この場合、おもり部は、略棒状の形状にする等、棒状部１０ａと棒状部１０ｂの間に設けることができる大きさと形状を備えることになる。

【００３２】

【発明の効果】本発明に基づく剣道練習具によれば、刃先部が、所定間隔を介して略平行に設けられた２本の棒状部を有し、該刃先部の先端側におもり部が設けられているので、本発明の剣道練習具によって素振りを行うと、しなりが大きくなり、手首等の筋力を強化することができる。また、おもり部の重さを感じながら素振りをするので、素振り動作に際して無駄な動きがなくなり、個人特有の癖の矯正にもなり、また、不適切な癖もつかない。よって、短期間で剣道の上達を図ることができる。

【図面の簡単な説明】

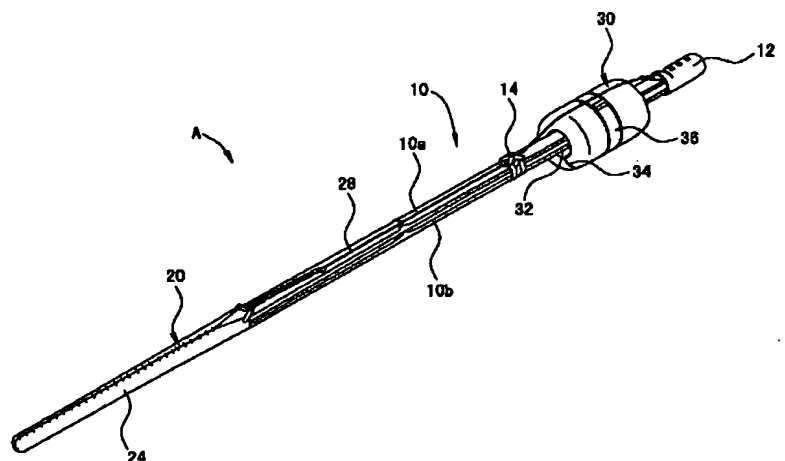
【図１】本発明の実施例に基づく剣道練習具を示す斜視図である。

【図２】刃先部と柄部の境界領域の構成を示す要部斜視図である。

【符号の説明】

- A 剣道練習具
- １０ 刃先部
- １２ 先皮部
- １４ 中結部
- ２０ 柄部
- ２２ 柄本体部
- ２４ 柄皮部
- ２８ 弦
- ３０ おもり部
- ３１ おもり本体部
- ３６ 押さえ部材

【図１】



【図 2】

